

室生犀星未刊行作品集

奥野健男
室生朝子 編
星野晃一

室生犀星未刊行作品集

第四卷

三
弥井書店

室生犀星未刊行作品集 第四卷

定価六〇〇〇円

昭和六十三年十一月二十八日 第一刷発行

著 者 室 生 犀 星

発行者 吉 田 榮 治

発 行 所 株式 会社 三 弥 井 書 店

〒一〇八 東京都港区三田三一二一六
電話 東京(〇三)四五二一八〇六九

振替 東京九一二一二三五
組版・印刷 鶴岡版印刷

乱丁・落丁本はお取替えいたしません

ISBN 4-8382-5004-5 C3391 ¥ 6000 E

目

次

風ぐるま	7
女は網をはられてゐる	14
母	28
菩薩	43
顔	59
町に女がある	67
正體	82
結婚に就いて	91
市井鬼記	103
この母親を見よ	111
八衢	135
鏡の中	149
情痴界限	162
春のコート	167
隈田川	183

花ヲ持ツタ文學少女	194
隣花村	203
戀もない宴	213
結婚前	227
息子	235
丘	239
わかうど	245
野芹	253
角	265
謎	269
解題	275
解説	285

室生犀星未刊行作品集

昭和Ⅱ（昭和8年～昭和19年）

風ぐるま

稼ぎがげつそり減つてしまひ、貧乏のうへに彼女らは貧乏した。そこで考へ直してよその稼ぎ場をあさつて見ても、東海岸の町一帯の収入は大抵それ以上にはならなかつた。彼女らは宵の口からうとくと卓にもたれると通り魔のやうな深い居睡りにさらはれ、寒さにもたれるへながら額を卓の上のころがしてゐた。しぐれ、それに震みぞれを加へて降る晩は一そう客がなかつた。腰から下、お臀はもちろん冷えきり、氷袋と違はなかつた。

八重子

父一人きりで八重子自身さへ知らない程職業がうやむやだつた。又文字通りの酔つばらひで無性に飽きつづく殆ど三年越し仕事をさがして暮らしてゐた。八重子はその父に都合のよい時も悪い時も月に十圓は持つてゆかなければならなかつた。下寺の多い浅草の寺廻りをし、寄附や世話焼の下に使はれ日雇賃でどうやら食つてゐた。

「お父さん、しつかりしないと困るわよ。」

彼女はまる一月かかつて貯めた五十錢銀貨ばかりの包みを前に置いてさういふのだが、父親はその時だけは眞面目きつて、濟まん、だがもう少しの我慢だといひ、金は手早くしまつて了ふのであつた。八重子はその十圓の金が殆ど二十人に近い人間の手から別々に手渡しされ、二十人の人間が八重子のからだの何所かに注目してゐたこと。二十人が二十人ともいやらしい舌と目と酒でもつれるみだらな言葉を叩きつけてゐた。その擧句に投げ出された一枚か二枚の銀貨が貯まり、父親にわたして來たのであつた。

八重子はその父親のところへ行くほかは外出しなかつたが、たつた一度朝早くから出かけ晩おそくかへつて來たことがあつた。八重子自身も何所へ行つたといふことはいはなかつたが、その顔に著しい疲れがあつてそれが何所で何をしたかを直覺させた。殊に亭主持である甲斐子や登喜子はそれを見抜かずに置かなかつた。只、どういふ男と出かけたものであるか、八重子を取りまく最近の客を物色して見たけれど分らなかつた。なぜかといへば、その晩も彼女に通ひつゞけてゐる連中が來合せてゐたことで、それでないことが分るのであつた。しかも、

その翌日は友達への借金を返し、月賦の呉服物の金を支拂ひ、ひる前一杯デパートに出かけて平常からほしいといつてゐたものを買ひ込んで来たことで、並々ならぬ相當の金はいつたものに想像された。

甲斐子の説では三日前に来たことのある山の上に住んでゐる商館通ひの西洋人ではないかといひ、その晩の當番が八重子でありくどくどと西洋人どくどくのしつこい口説き方をしてゐたことでも、また、西洋人がかへつてから八重子の機嫌がよかつたことでも分るぢやないのといつた。西洋人はケチではあるがたんいふことを聞いてやると法外な金を投げ出す習慣があるらしく、そんな例が今までに随分あつたのだ。甲斐子はきつとさうよ、さうでなければあれだけの買物はできるものぢやないわといつた。

田鶴子

田舎は蜜柑がこがねいろの天套を張る、伊豆の吉奈の在だつた。結婚をすねて飛び出し小母さんの家に行つてみたが歸れがしにされすぐ近くの稼ぎ場にはいると間もなく這入つてみて今夜からでもといふので、小母さんの家からその晩から飛び出して勤めたのであつた。そして

まる一年のあひだに夏のシケビきに時計を質に入れ、それが出されずに彼女は思ふのであつた。誰か、時計を出してくれるやうな人がゐないかと、あまさうな人をみると話さうかと折々考へてみるのだが、この頃ではそんなことを思ふた蟲のよさを自分でせせら笑ふくらゐになつてゐた。

小母さんの家では白粉^{わしろ}をひと瓶づゝ、毎月のはじめにくれるのであるが、それがどんな譯だかわからなかつた。自分で出て行けがしにしたゝめに左ういふおべつかをするものとしか思へなかつた。田舎からは歸れとも何とも言つてこなかつたが、兄の世帯だから末つ子の田鶴子なぞはうつちやつて置いてもいいゝのだらう。

彼女は一年のあいだにどういふ男でも、その髻^{ひげ}の毛をつかんで搔^かすぶることを覺えた。他の女には出来ないそんな藝當をわけなくやつて、せゝら嗤^{わら}ひ、ひでえことをしやがると半分怒る客もその子供くさい、子供くさいために例外にちよつと可愛げである彼女を咎^{とが}め立はしなかつた。それゆゑ彼女は増長し、すこし厭らしいことをいふ奴の頭の髪の毛をむしり取ることに成巧した。

「田鶴さんたらよくあんな眞似ができるわ、お客さまがぶん／＼してゐるあひだにあの人は嗤^{わら}つてゐるんだも

の。」——田鶴子はだから故郷の蜜柑畠のことは思ひ出さなかつた。只、彼女は蜜柑をたべるときに静岡なまりで、子供のときから覚えてゐるそれをみんなに教へるのであつた。「蜜柑は袋をたてに齒で破つてから食べるものよ。」さう言ひ、彼女は猿のやうに巧に蜜柑の汁をすするのであつた。

みよ子

彼女は蓄音器と同じ金屬的な聲を出し、水兵服を着、ふく／＼肥り、曖昧な笑ひ聲と舌を出すことゝを特徴としてゐた。女學校三年を修めた彼女は婦人雜誌をよみ客と小説とか詩とかの話をし時々變なブリキのやうな聲音で夜のしらべとか、トラムライだとか、荒城の月とかをでたらめに唱つた、彼女はそれらをうたふ時は多少感傷的でありその感傷的なものは従つて嚴肅な悲壯の趣きをそなへるのであつた。彼女はいつどういふ事から話が

進んだものであるかある軍人下りの男と半分結婚しかかつた折に、軍人は出征し、その間に彼女は別の海苔屋の若主人と結婚しかかり、このカフェ・ライトの主人もそれを許し、彼女は階下のスタンドのうしろにある三疊で寢起し、海苔屋の主人もたまに訪ねて來、着物や頭の

物や化粧道具やトンカツなどを奢るのであつた。

さういふ待遇に對しては誰も何もいはなかつた。只二階から小用を達しに下りて行くときは夜中でもそつと足音に神經をつかひ、彼女らは若い男女が同じい床のなかで寢てゐることなどを問題にしてゐないことを證據立てるためにも彼女らは暗いところであつても三疊の方は見ないふうな徳義を重じてゐた。それにも拘らずみよ子はさういふ三疊の部屋の生活について、明らかに自分は主人から許されてゐるのであるが、しかし潔癖であつて不しだらなことはしてゐないのだといふことを、何かにつけて證明しようと企てるのであつた。「昨夜あなたがはばかりにお下りになつたとき、わたくしまだ雜誌をよんでゐたのよ。」

しかし甲斐子は笑つて目の前でみよ子の顔の赧くなるほどの、露骨な竹筴返しを酬いのであつた。

「雜誌をよんでいらしたかどうかは知らないけれど、女同士にはそんな白ばくれなくてもいいものよ、お察ししてゐるわ。」

甲斐子

甲斐子は文字通り甲斐の生れだつた。

彼女は坂の下にあるアパートの一部屋を借りて住んでゐたが、通ひの女は彼女とルリ子だけだつた。甲斐子は毎土曜日には店の方を休んでゐたが、それは日本橋の店に勤めてゐるらしい亭主が泊りに来るためであり、そのことは皆知つてゐた。大して裕福ではないが着物も相當に新しいのを着てゐるし染め返しや縫ひ直しものは着なかつた。綺麗も美しくはなかつたがどこか八雲何とかいふ女優に似た顔をしてゐた。

最近彼女のところは繁々通うて来る會社員と、度たび外出し、その男と結婚するまでに話ははづんでゐたが、彼女の日本橋の男は承知しなかつたために話は折れてしまつた、それほど甲斐子は熱心に亭主に別れ話をもちかけたものであるが、平常さういふ話を持ち上つてゐたに拘らずいざとなると、意地づくでも別れてはくれなかつた。そればかりでなくそれ以上にその會社員と關係をつづけるならば姦通罪とか何とかで訴へるといふふうに着かされ、氣の小さい會社員は手を引かうとし、甲斐子も何となく空恐ろしくなつてそれ以來その話は切り出さなかつた。

甲斐子はその會社員についてこんなふうなことを喋つてゐた。

「嫌ひでもなし好きでもないんだけれど、日本橋の亭主よりか貧乏くさくなくて何所か新鮮な氣がするわ、男てものはしばらく一緒になつてゐると何か古いやうな氣がするものよ。だからあの人が若くて新鮮な氣がするものも仕方がないことだわ。」それで、會社員はやはり通ひ、甲斐子はカフェに泊つてゐる名目で男と外出をつづけてゐた。そのうち必^{きつ}と別れるやうになるわ、一たん別ればなしが出たら何時かさうなるのがお極りよ、彼女は彼女に都合のよい宿命論を持ち出して、亭主との關係について窺^{ひそ}かにたかを括つてゐたのだ。

登喜子

彼女も亭主持ちであり、亭主はコック上りでいまは職を放れてぶらぶらしてゐた。ぶらぶらしてゐるくせに遊びに耽りわるい病氣を背負つたので、彼女は時々場末の女が一番わるい下品な調子でこきおろし、どこへなりと勝手に女ができたら行つたつて關はないとか女房に働かせて食ふ男なんかはよくよくの怠け者か懲り性のない男だとか、せめて男なら男らしくわたくしを見返すやうな女一匹をつかまへて見るとか、よくも疲れてかへつて来る女房をまんじりもしないで、夜中の一時まで待つて

ゐられたものだとか、そちらはそんな氣でゐてもこちら
はくたびれてゐるからお前さんのお對手なんぞ出来ない
とかいって、彼女は一週に二度くらゐ歸つても邪慳じやけんにあ
しらつて、女らしいことはしなかつた。

だから皆にはいつでも男も澤山ゐるが攘りにも撰つて
わたくしは碌でなしを釣りあげたとか、たまに街へなぞ
出かけると喧嘩でもして頭を割られてくたばつて了つた
らいゝとか、せめて外國航路の皿洗ひにでもなつて日本
を離れてくれゝばさぞせいゝするだらうとかあるだけ
の惡體について、男なんて厭だと思ふと臭ひをかぐだけ
でもむつとして来るわと、齒をちゆくゝ吸ひながら根か
ぎりに憎々しげに罵りちらしてゐた。ぢやわかれたら
いぢやないのといふと、だつて向ふで動かないからどう
にもならないぢやないの、どんなに輕蔑したつてまるで
痒かゆいとも何ともいはないんだもの。ふん、ふんといつて
笑つてそれでわたくしが飯を炊いてやらなければ簡易食
堂へでも行けばいゝのに、二日越しに前の鯛焼屋を二階
から呼んでそれを床のなかでむしやついてゐるんですも
の、どう仕様もないわ、飯を炊いてやると、白い飯つて
うまいもんだなあと、かうなんだもの、しまひにわたく
しだつて疳癪がたかぶつて頬べたをひつぱたくんだけれ

ど、痛えといったきりてんで張りがなかつた。あんな男
つて犬か鬼にでも喰はれてしまへばいゝわ。

そこでみよ子は蓄音器のやうな聲をして「あんたは御
亭主のことをそんなにぢやんゝやつゝけてゐるくせに、
ちつとも不愉快な顔をしないで全で面白くて仕様がな
いやうにお喋りしてゐるぢやないの。だからわたくし考へ
るのよ、口ほど嫌なんぢやなくてそんなに毒つくのもお
のろけのうちだと思ふわ」さういはれると登喜子は寧ろ
それがうまく當つてでもゐるやうに、嬉しさうに高笑ひ
をつゞけてゐた。

彼女も亭主持ちであるが、何を職業にしてゐるのか本
人も言はないし、誰も知らなかつた。それは曾て亭主の
惡口を噂をしたこともなく、尋ねてみてもそんなこと知
らないわといったきり紛らして了つてゐた。無口で、悲
しさうに笑ふだけで別に巫山戯るといふこともなく取り
立て、鬱ふさぎ込むでもなく、いはゞ平凡な常識的な女にす
ぎなかつた。只、彼女は酷い貧乏をしてゐた。貧乏なこ
とはみんながそれに間違ひはなかつたけれどルリ子の場合
は着物や足袋や履物にも影響してゐるばかりでなく、
食事のことで著るしく眼立つてゐた。食事は通ひの女達

で早番のものは朝食を済ましてからつとめることになつてゐたが、遅番は夕方五時のつとめであるから晝の食事も済まして出なければならなかつた。しかしルリ子は遅番の時も朝から何も食はないでゐるらしかつた。わたくしはお店で食べるからいゝわ、とさういつて亭主だけに食べさせてから出て来るらしく、羨ましいくらゐ亭主孝行だわと噂されてゐた。

それからもう一つは彼女も稼ぎがすくないせいもあるが、何時も鰹かつお一文も持つてゐなかつた。只、黙つて客の對手をしてゐる溫和しい彼女は酔つぱらひに取つて面白くも可笑しくもない女で、そんな女はしぜんに貰ひも少なく出す方も出さないらしかつた。冗談もいへず唄もうたはない彼女は垢かじみて埃ほこっぽい感じがするうへに、ひどくジメジメした生活的な暗みをおびてゐて寧ろ陰氣くさかつた。だからさういふことを知つてゐる彼女はわたくしなんかこんなつとめに向かない女だと言ひ、早く止めたいと言つてゐたけれど實際はそれどころではなかつた。この大森から大井の町まで省線に乗ることさへ儉約し、夜の一時ころに毎日歩いてかへつて行くのだが、そんなことは平氣らしかつた。甲斐子の話すところによると彼女は客から煙草を貰ふと、それを袂たもとのなかに入れて

毎夜のやうに何本かを貯めて持つてかへるらしいが、それも亭主に喫くませるためにさうするのであらう、その亭主には餘程参つてゐるにちがひない、あんな氣持に死ぬまでに一度でもいい、からなつて見たいと甲斐子は冗談まじりに皮肉つてゐた。

すず子

皆にいはせるとすず子はがつちりしてゐると噂されてゐるけれどそれはどうだか分らない、只、彼女がこゝに來るまであらゆるカフェを一枚のエプロンを袂たもとにねち込んで、渡り歩いてゐたといつてもよかつた。銀座から新宿へ行き最後に大森に來たのであるが、二年間に九軒わたり歩いた割合にすれてはゐないやうであつた。だが盛り場盛りばにゐた女のつねとしてこの場末ばつにゐることに氣が負けるのか、二言めには來月は銀座の方に出るのだとか、かういふ郊外のカフェはつとめやすいが何の足しにもならないとかいつて、優に自分が銀座にゐたことを誇るやうなところがあつた。しかし彼女自身はもう銀座の方につとめる年頃でもなければ、綺織きしきもわるく、どこか場末女ばつめめとか思はれなかつた。だからみんなは、すず子の銀座といふふうににその話しにはあたまから冷笑つて對手に

ならなかつた。

彼女は通ひではないが時々出かけ、出かけると夕方にならなかつた。稼いだ金で着物や化粧道具を買ふといふこともなく、どこにそれを費ふのかわからなかつた。何かタニのやうに食つてゐる男がゐてそれにつぎ込んでゐるやうにも思はれ、それがこの女の悪い因縁のやうでもあつた。だから彼女は十日に一遍くらゐ於て出かけるときには、厭だ厭だといひ、そんな厭なら出かけない方がいゝぢやないのといふと、でもそんな譯にはゆかないのよ、これには深いわけがあるのよ、銀座時代からくされ込んでゐる譯があるのよ、そんなこと話すことができないわ、でもわたしのやうな女はわたしの十倍くらゐ氣の強い男でも對手にしてゐないと、そりやカラ意氣地がなくて弱氣になつて鬱いでばかりゐなきやならないわ、わたしといふ人間はいつもガンと頭をどやしつけられてゐないと、どうにも仕様のないぐうたらになつてしまふのよ。わたしがいろんなところを渡り歩いたのもわたしが弱いからであつて、強かつたら一とこで頑張り通してゐたのよ、人がよい着物を着れば着るですぐ鬱いでくるし、自分の客がよその女につられて行けば鬱ぐし、ちよつとした強氣の言葉でやつつけら

れるともうそれでビヤンコになつてしまふんですもの、自分であきれるくらゐ氣が小さいわ。世間ではいろんなところを渡り歩いてゐるからガツチリした女だなんていふけれど、それは度胸がないからふら／＼して歩くのだわ、度胸があつてほんとにがつちりして居れば一つところに動かないで稼ぐわ、稼ぐときには動かないでゐなければだめだわ、古いなじみをそらししまつて絶えず新しい客ばかり對手にしてゐたら、それこそ収入なんかかゝの知れたものだわ、わたしはそのうちきつと、もう一度銀座に出て行つて思ふさま稼いでみたいわ、一生をもみくちにしたつて銀座の方がいいわ、あそこならわたしたちの死場所のやうなものぢやないかしら、わたしたちのやうな稼ぎがなければならぬ女たちにはそれぞれ死場所といふものがあるものよ、こんな田舎では、雨がふれば泥海のやうになるところでは死にきれないわ。

——彼女はしやべり出すときりがなく、それに昂奮して行つてしまひにキイキイ聲になり、あたり關はずにしやべり續けるのであつた。それは彼女が何となく少し足りないやうなところを感じさせ、頭のどこか遺られてゐるのではないかと思はせるところがあつた。だから多分さういふところを誰かに利用されてゐるのであらう。

女は網をはられてゐる

——あたくし、もうひけません。

——そんな氣の弱いことをいふものぢやない。ゆみを
おとりなさい。

——でも先生……

——ゆみを取りなさい。

花子はさしつけられてヴァイオリンのゆみを取った。

木住はピアノに向ひ、弾き出したが、依然花子について
行けなかつた。あせるほど、音いろが悪くなり調子にあ
せつた感情が移つて、それを取りまとめることすら出来
なくなつた。

ピアノが歇んだ。

花子は胸がせまつて、——濟みませんといひ、泣き出
した。うしろ向きになつた儘いくらでも泣けてくるので
あつた。泣きながら最初はうまく合つてゐたのと思ひ、
何時ものやうにゆつくりとした木住の伴奏がどれだけ花
子をそらすまいと、低音調に弾かれてゐたかわからな

つた。それに甘えるわけではないが、泣いてゐると一層
木住のしんせつさがピアノを中に置いて、しみぐ感じ
られた。

——けふは僕が無理をいつたからもありますよ。

……

——この次は落着いて出直すやうにしませう。

——でも先生、わたくしとても、……

——はじめは皆さうですよ、器樂のくるしさが其處に
あるんだから。僕も一生懸命にやりますからあなたもそ
の氣であててください。

——はい。

——僕なんぞはゆみで先生に手を能く叩かれたもので
す。

花子はうるんだ眼で木住を見て、きふに濟まなくなり
何か決心をしなければゐられない氣持に追ひ詰められて
ゐた。花子は光線が瞳にきらついたひかりを見せるとき
のやうに、昂奮して瞳をあげた。

——わたくしもお打ちになつていたゞきますわ。

そのいゝわとぞんざいにいひ損なつたのが極りわるか
つた。

木住は笑つて、そんなことをしたらあなたは來ないで